

藤女子大学 文学部 日本語・日本文学科

二〇二六年度 学校推薦型選抜・公募推薦入学試験問題

## 小論文

二〇二五年十一月十五日（土） 十時～十二時（一二〇分）

### 注意事項

- 一、問題は四ページ、解答用紙は二枚です。
- 二、受験番号は、解答用紙の所定の欄に記入して下さい。
- 三、答案作成のための下書きには、所定の下書き用紙を使用して下さい。
- 四、試験終了まで退室できません。

問題 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、設問の都合上、一部変更した箇所があります。

むかし、ずいぶん前のことですが、加藤周一さんと新聞記者の方々の前で公開対談の形で対談をしたことがあります。新聞が現実とどう係わりあっているかに問題があるかが全体のテーマだったように記憶しますが、文体の問題に話が進んだとき、加藤さんが、新聞の文体は非常にいい。他の面では日本の新聞は相当難点をもっているけれども、明快な文体を作り上げた点だけは功績として称えていい。文筆家は以て範とすべきではないか、という意味のことをいわれました。彼は忘れましたが、それだけは鮮明に覚えています。痛かったからでしょう。

たしかにその通りで、とくにわれわれ社会学者の文章は読みづらい。啓蒙を目的とした文章でも自然科学者の書いたものの方が読みいいんじゃないでしょうか。その辺も一つの問題ですけれども、とにかく、筆者の意図が、比較的近い同業者であるはずの私にも、明快に伝わってこないものが多い。それに較べると新聞の文章は読みいい。一読明快です。以て範とすべきに間違いはない。

しかし一読明快で尽きるかというと、そこにはみ出してくる重要な要素があるんですね、文章には。ということを手がかりにして本を古典として読む、読み方の問題にせまってゆくことにしましょう。念のため申しそえておきますけれども、加藤さんが、その一読明快からはみ出す要素の重要性を知らないなんていつているのではないんで、それは加藤さんの文章そのものが明快に——かみ噛みしめて、読めば(強調)（強調点に注意）明快に——語っています。その意味では、ここで加藤さんをひっぱり出すこともないんですけれども、加藤発言に刺戟しげきを受けて考えたことですし、問題を理解していただくにも便利だと思うので、加藤さんには御迷惑ですが、加藤発言を使い、意識的に純粹培養し一面化して、お話しすることにします。

これは、情報として読むか、古典として読むかという問題に、対応するわけです。

新聞は、——以下、新聞の一極だけを純粹培養するというわけですが、読者に必要な新しい外部情報を迅速正確にとどけることを第一の任務として、それに適当な文体をえらんでいます。読者の眼の構造を変えるなどということは直接の狙いではない。そういう狙いからすると、一読明快が理想になりましょう。さいしょ眼を通して、さてもう一度読むと全然ちがっていたというのでは、新聞として困るわけですね。一読目ですべて氷解する。再読の要なし。その意味で第一に一読明快でなきゃならない。

それから、もう一つ。どう読もうと読み方によつて、左右されない、それが新聞のもう一つの狙いです。電車のなかで立読みしても、書齋でじっくり腰をすえて読んでも、大事な点は同じでなきゃ困りましょう。受身で読んでも理解にこと欠かないのが理想で、読者が、そこへ身をふりこんで、目をさらのように文章と格闘して初めて真意が解る、というんじゃ困るんですね、新聞としては。ぼやっとしていても、心ここに在らずとも、見る人の眼に向うから飛びこんできてそのままちゃんと理解できる、これが理想です。あるいは、そういうふうによむ読者を前提している。その意味では交通標識・信号に大変よく似ております。(黒板に右折禁止の交通標識を書いて)これ速読で明快じゃないと困るでしょう。よくよく注意して見ればなんていう情報の提供の仕方は、標識としてはちよつと、ちよつとではなくて全然困る。深く読もうが浅く読もうが、受身のままで明快に解る。そういう情報の提供の仕方がここでの理想で、そういう提供の仕方は、そういう情報の受けとり方を前提しそれに対応している。ここで私が、情報として読むと書いたのは、そういう読み方を指しているわけです。

さらにもう一つ。情報の一義性——誰が読んでも同じに読めなきゃならん、ということがあります。

交通標識が、高い所から周囲を睥睨する大型トラックの運転手にも、ミニバイクでうろちよろしている自任八千草薫さん族にも等しく同様に受取られねばならないように、新聞のニュースはさまざまな読者に対して一義的に理解されることを狙いにしていますね。ところが……

たとえば、そうではないのが古典であり、古典としての読み方だということがお解りでしょう。それを鮮明にするために、古典を説くにわざわざ廻り道をして新聞を例にとったんです。どちらがいいなどといっているではありませんよ。読み方の違いをはっきりさせるのが狙いです。

古典は、第一に、一読明快じゃない。二度読めば変る。むしろ、一年後に読んで、あの時はこう読んだけれど浅はかだった、本当はこう書いてあったんだなあというふうにして読めてくるような内容をもっていなければ、古典とはいえないでしょう。「本当はこうだったんだなあ」と読めるところにこそ古典本来の味があり意味がある。一読不明快は古典の運命ではなく目的そのものです。

文章は同じなんですよ。A氏の本の何ページというのはまったく同じで、その同じものの読みが変る。読み手である自分の成長とともに違ってくる。古典の名に価する古典であるほど、その違いは大きいですね。古典がそうだというよりも、むしろ、そうであるのが古典だといひ変えておきます。その方が正確ですから。現在古典として一般に認められているかどうかは別として、そういう内容をもったものは、あるいはものこそが、すなわち古典である。この認識は重要ですから、御記憶ねがいます。

それからまた、第二に、さきほどの交通標識の場合、受け身でも何でも解らなきや困るといいましたけれど、古典の場合はそうじゃないでしょう。どう読むかで読みが違ってくる。繰り返し何度読もうが、ぼやつとして読んだんじや読めないんですよ、古典は。踏みこんで、目を皿のようにして文章と格闘して初めて、中身、すなわち古典の古典たるゆえんが解ってくる。それも、多くは一番いい所が隠れているんですね。その意味で文意明快じゃない。

むかし、本位田祥男先生から、講義をする時は、声をひそめるのがコツだ、そうすれば聴衆が聴き耳を立てるから、と伺ったことがあります。情報の提供の仕方が交通標識やとくに新聞の場合と逆ですね。そういえば、近頃世間一般にやたら声高になってきたのに気がつきませんが、これは社会が全般に、読書界や思想界をも含めて、古典的から情報的に移ってきている証左でしょうか。ギラギラする表現で、人が犬を噛んだという類いの思想界の事件が、毎月大きく広告されます。万人の知ることを静かに語るような本は、大広告向きではありませんね。

念のために申しあげておきますが、書く方は、あくまで一読明快を念として、死力をかたむける。避けうる晦渋かいじゆうに無神経であるような、いわんや難解をこととしているような本は、書かれた中身からいつてもとうてい古典としての内実をそなえ得ない。ということを作ちしつ者は知悉し、意識して、一読明快な文章への結実けつじつに骨身をけずるのだが、それにもかかわらず、あるいはむしろその努力によって、一読明快からはみ出すものが、結果として含まれている。それが古典でしょう。読む方も、また——安易に再読にゆだねず、——一読で読み尽そうと死力をかたむける、ということも固くなるばかりが能じゃないんで、むしろ身体をほぐさなきやならないんだけれども、とにかく、踏みこんでいねいに読むんですね。にもかかわらず、というか、むしろ死力を尽していねいに読めば読むほどその奥深いふところには、なお隠されたものが残る。それも、最も本質的で貴重なものが残るんです。

さきほど、古典は、一読で尽きないものをもっているといい、すぐ、正確には、そういう内容をもっているのが、一般に古典としてみとめられているかどうかは別として古典である、といいかえましてけれども、ある本が——古典として既に認められているものをも含めて——古典である、ゆえん、果して古典であるかどうかの確認は、そういう一読にかけた深い読みの繰り返しで初めてできる。そういう読みを要求し、それに応えうるのが古典である。古典といわれている本も、そういう読みであらためて古典としてその人に検証され確認されてくるでしょうし、同様に、古典の公認を受けていない本も、新旧にかかわらず、これこそが古典として浮かんでくるでしょう。少くともまずはその人に「私の古典」として。

だが、さらにもう一つ、第三番目にもっと重要な違いがある。

さきほど交通標識を例にあげて、新聞のニュースは、誰にも同じように受取られることを狙いとしている、といたしましたね。

ところが古典の場合は、人によつて受けとり方、読みの内容がちがう。いいかげんに読んでいるわけじゃない。それぞれ正確を期していいねいに読む。ていねいに読んで、しかも理解がちがってくる。むしろ、ていねいに読めば読むほど、「読まれた」中身は個性的になってくる面があるんです。同じ作家に傾倒して、しかも、その作家の甲という作品にこの作家の粹があるという点で共通の理解があるかに見える人についても、よく聴いてみると、何のゆえに甲作品を採るか、その理由というか根拠、要するに本文の解釈つまり受けとり方は、微妙に違っている。微妙という形でじつは全然違っている場合も、案外多いんです。要するに理解は一義的ではない。交通標識の場合とは、はなはだ違うところです。

不注意に読めば何でも読みちがいます。しかし古典は、ある意味でていねいに読めば読むほど、各人に違つた中身を呈してくる。これは古典としての読みに特徴的なことです。

(内田義彦「読書と社会科学」)

問一 「情報として読む」ことと「古典として読む」ことの違いに留意して、本文の要旨を二〇〇字以内でまとめなさい。

問二 「情報として読む」および「古典として読む」という読み方について、自分の思うところを八〇〇字程度で書きなさい。



二〇二六年度 文学部日本語・日本文学科 学校推薦型選抜・公募推薦入学試験

小論文 解答用紙 二 (二枚のうち一枚目)

受験する推薦種別に○をつけ、  
受験番号をご記入ください。

<input type="checkbox"/>	姉妹校推薦
<input type="checkbox"/>	カレッジ校・女子校推薦
<input type="checkbox"/>	指定校推薦
<input type="checkbox"/>	公募推薦
受験番号	

5	10	15	20	25
100字				
200字				
300字				
400字				

